

美作の狛犬（5）

田渕千香子

はじめに

狛犬調査を始め、早4年以上がたちました。最初は、右も左も分からぬ状態でしたが、調査を続ける中で、耳：立っているもの・垂れているもの・横にのびているものなど様々です。大阪の狛犬（写真A-①）・出雲型（写真A-②）は垂れ耳、岡崎型（写真A-③）・尾道型（写真A-④）は、横にのびていることが多いです。

狛犬とは

神社・仏閣の参道などでよく見かける狛犬の歴史は古く、平安時代頃に発生したとされています。このころの狛犬は、木製で建物の中に奉納されていました。今、見るような石造の狛犬は江戸時代頃からのもので、左右の違いは殆どありませんが、平安時代頃のものは、角があり口を閉じているのが「狛犬」、角がなく口を開けているのが「獅子」と外見で分かるように区別されていました。この狛犬を神殿狛犬といい、後に影響を受けた石造狛犬もあります。2010年から書いてきた『美作の狛犬（1）～（4）』では、参道に所在している石造狛犬について考察しています^{（註1）}。

狛犬の観察

狛犬を前にして、まず目に入ってくるのは「顔」です。顔と言っても、目・耳・鼻・口・歯などに分けて見ても一個体ずつ違いがあることがわかります。たて髪や尻尾、胴体にも特徴があり、こまやかな細工の様子からは高い技術力が感じられます。また、狛犬の姿勢には、直立したもの、構えて今にも飛びかかるべきなもの、玉乗りをしているもの等があります。さらに、台座には、年代・寄進者・石工銘・寄進理由など多くの情報が書かれています。これらの顔の形、姿勢、台座の情報などから狛犬の型式などを判断しています。また、台座本体の石材は、狛犬本体と違ったものを使用することが多く、運搬のしやすい地元の石材を用いることがあります。また、実際に観察を行うときに注意している事ですが、観察ノートを自作しメモをとりながら、狛犬の情報を書き留めています。現地に行って観察しないと分からぬ情報などもあるので、書きもらさないように注意しています。では、

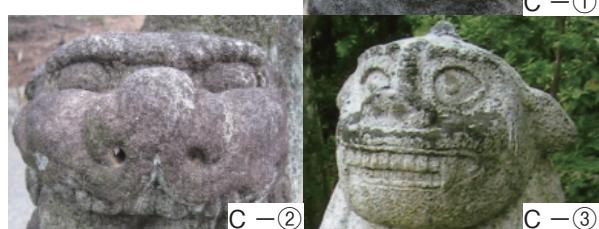
狛犬の特徴を挙げていきます。



目：丸く周囲をかたどっただけのものや（写真B-①）、目の中を彫って眼球を描きくわえたもの、着色されたものもあります（写真B-②）。



鼻：豚鼻・人の様な鼻・団子鼻など、実にユニークな表情を見せてくれます（写真C-①～③）。



口・歯：口の形、歯の本数などに着目します。口中に玉を入れた狛犬は、出雲型狛犬によく見られる特徴です。口中を空洞にする際、玉の部分だけ残して彫るため職人の高度な技術を窺わせます（写真 D -①～③）。



D -①



D -②



D -③



E -①

たて髪：カール・ストレート・ウェーブなどがあり、細やかな細工に驚かされることがあります（写真 E -①～③）。



E -②



E -③

しっぽ：筆先のような尻尾は出雲型によく見られます（写真 F -①）。蠟燭のような尻尾は、岡崎型です（写真 F -②）。扇型は、大阪の狛犬の特徴としてよくみられます（写真 F -③）。はめ込み式なのか彫って尻尾を表現しているのか分かりませんが、珍しい狛犬もいます（写真 F -④）。



F -①



F -②



F -③



F -④

角：「獅子（阿形）」・「狛犬（吽形）」と分けて考えられていた神殿狛犬の形式を継いでいる大阪の狛犬の吽形に見られることがあります。



G -①

胴体：唐草文様（写真 H -①）、斑点文様、羽などが体表に描かれています（写真 H -②）。この渦は太陽を表し、吉祥の意味が込められているようです。古代オリエントには、獅子に羽が生えていることからこれが日本に入ってくる段階で簡略化され、ヒレのようなものが描かれるようになったと考えられています^(註2)。



H -①

姿勢：座った姿勢（座型）・構えた姿勢（構え型）・玉乗り型などがあります。座型は、大阪の狛犬・岡崎型の基本姿勢（写真 I -①）。構えた姿勢は、出雲型によく見られる形です（写真 I -②）。玉乗り型は、尾道型などに見られる形です（写真 I -③）。



I -①



I -②



I -③

玉取り・子取り：手に玉を持った狛犬（写真J-①）・子どもの狛犬がじゃれる狛犬（写真J-②）など作者のこだわりが感じられる部分です。



J-①



J-②



L-花崗岩



L-来待石



L-凝灰岩



L-砂岩

台座：台座には、時代・寄進者銘・寄進理由などの情報が書かれています。字が読めなくなっているものがあるので、拓本を取ったりカメラの写し方を工夫しています。獅子や、牡丹などが描かれたものもあります。



K-①



L-備前焼



L-コンクリート



L-樹脂



L-木

材料：平安時代には木で造られていた狛犬は、江戸時代へ入ると参道に出現し風雨に耐えられる石で造られるようになったようです。使用される石材には、花崗岩・凝灰岩・砂岩などが使用され、岩石以外にも、備前焼・コンクリート・銅・樹脂など様々な材料で、狛犬は形作られています。さて、現在は車などで運搬すれば簡単に運べる石材ですが、江戸時代には運搬するだけで一苦労だったと思われます。こうした事情から、江戸時代の狛犬の中には、地元の石材を使ったものが多数存在しているのだと考えられます。



L-銅

種類と型

狛犬を分類すると、大阪の狛犬（大阪・関西地方）・出雲型（島根県）・尾道型（広島県）・岡崎型（愛知県）・江戸獅子（関東地方）など、地域の特色ある狛犬が造られ進化していることがわかります。美作地域では、大阪・島根・愛知・広島・鳥取など各地から狛犬が流入してきています。

大阪の狛犬（写真 M -①）：大阪の狛犬は、形が多種多様であるため形式が定まっておらず、大阪の狛犬とよんでいます。美作地域では、江戸時代後期～明治時代までの古い狛犬に多く見られます。中山神社（津山市一宮）の狛犬は、県下で最古の狛犬であり、大阪の石工が造った狛犬です。大阪の狛犬の特徴を挙げると、垂れ耳・横広の鼻・団扇状の尻尾・前足は、太く短く、たてがみが螺髪のように回転しています。姿勢は、座形が基本で、顔は縦長で彫が浅く、目の中に彫り込みがあり、鬼面・人面に近い印象です。また、「獅子・狛犬」の形式を踏襲している為、吽形の頭部には角があるものがあります。花崗岩で造られたものが多いなどの特徴を挙げることができます^(註3)。

出雲型（写真 M -②）：出雲型狛犬は、島根県松江地方で採れる来待石で造られた狛犬です。細かな細工が可能な砂岩で、耳が長く、尻尾は筆先のような形をしています。構形と座形と姿勢が2パターンあります。美作地域には、来待石ではなく地元の石材で造られたものが多く所在しています。これは、明治時代までは、来待石の藩外への搬出が禁止されていたためと考えられています。砂岩であるため風雨に弱いところもあります^(註4)。

尾道型（写真 M -③）：尾道型狛犬の特徴は、長く伸びた鋭い犬歯を持ち、尻尾は刺々しく逆立ち、耳が横に大きく突出するもので、座形・構形・玉乗り形の3タイプがあります。また、美作地域には、小豆島の石工が入ってきており、出雲型・尾道型と大阪の狛犬をミックスしたような狛犬を造っています^(註5)。

岡崎型（写真 M -④）：岡崎型狛犬は、愛知県の岡崎地方で誕生した狛犬です。神殿狛犬の様式を踏襲したもので、酒井孫兵衛（6代目）という石工が岡崎型の造り方を大工仲間に教えたため、大正から現在にかけて多く分布するようになりました。美作地域にも酒井孫兵衛の作品が奉納されています^(註6)。



M -①



M -②



M -③



M -④

変わり狛犬：狛犬が徐々に画一化されていく中で、我が道をいく狛犬もあります。



N-①



N-②



N-③



N-④

註

- 1 『年報 津山弥生の里 第17～20号』田渕千香子
2010～2013年 津山市教育委員会
- 2 『日本全国 獅子・狛犬ものがたり』上杉千郷 2008
年 戒光祥 p.126
- 3 『日本全国 獅子・狛犬ものがたり』上杉千郷 2008
年 戒光祥
- 4 『年報 津山弥生の里 第19号』田渕千香子 2012
年 津山市教育委員会
- 5 『倉敷の歴史 倉敷市総務局総務部総務課第20号』「狛
犬石工銘に関する考察 その二 徳松と吉松」藤原
好二 2012年
- 6 『年報 津山弥生の里 17号』田渕千香子 2010年
津山市教育委員会

おわりに

今回は、狛犬を観察する時の着眼点を挙げ、美作地域に所在する狛犬を紹介しました。

美作地域の狛犬という身近なものから、深く地域の歴史や文化を知ることができました。狛犬に限らず、今まで目を向けられていなかったものに着目することで違った角度から歴史を研究することができるとわかり、その大切さが分かりました。また、私その他にも狛犬を研究している方は多数おられ、狛犬の研究会へ参加する機会を得ました。県内・外の研究者の方たちと交流することができ力強く感じました。一人でも多くこうしたものに興味を持たれる人が増えると文化財の保護などを考える人も自然と増えるのではないかと期待しています。